

北海道縦断の歩き旅は、昨年の春、函館を出発して長万部でギックリ腰になってリタイアしたのが第1次。神戸に戻って十日あまり静養した後、再び長万部から小樽・札幌を経て滝川まで進んだ第2次。第3次の今年は、滝川から旭川・名寄・音威子府・サロベツ原野・稚内を経て最終目的地の宗谷岬まで350kmの旅だ。歩き旅の後は、礼文島と利尻島を訪ね、また稚内から車でサロベツ原野の海岸線や美瑛などの景勝地を巡って、5月28日から6月16日まで20日間の旅を無事終えることができた。

### ■道北の道

#### \*道みちの風景

歩くコースは昨年同様、基本的に鉄道に沿う国道を行った。特に旭川から北の道北は鉄道に沿った道でないと町や村もなく、従って宿もない。滝川から旭川までは函館本線と並行する国道12号、旭川から稚内までは宗谷本線と並行する国道40号を行く。北海道に限らずこれら鉄道や国道は大きな川沿いに延びているので、滝川から旭川へは石狩川を眺めながら歩き、旭川のすぐ北にある塩狩峠からは天塩川を眺めながら稚内へ北上する旅となる。

なお、塩狩峠という名の由来は天塩川水系と石狩川水系とが分かれる峠なので、二つの川の名前から取ったという。また三浦綾子の実話を元にした小説の題名にもなった峠だ。三浦綾子記念館と共に、逆走する客車を止めるためレール上に身を投じて殉職した若き国鉄職員、長野政雄氏を顕彰する石碑が建っていた。

道北の道は人口密度の低い地域を歩いてはいるが、国道、道道（県道に同じ）共に道幅があり歩道も広く取ってあって、車を気にせず安心して歩くことができた。

直線道路の先は点になっていて風景は雄大だ。道路脇にはイタドリや大きなフキやたんぽぽが群生し、石狩川流域は大水田地帯が広がっている。塩狩峠を越えて天塩川に沿って名寄あたりまで北上すると牧草地も見られるようになり、名寄の少し北にある美深で水田が終わる。因みに名寄、美深は餅米生産量日本一で、伊勢の「赤福餅」の餅米は名寄産が中心とか。

稲作の北限地、美深を過ぎると牧草地ばかりになり、サロベツ原野に入ると見渡す限りの熊笹と防風林、それに風力発電の風車、そして巨大な利尻富士が姿を現す。

稚内から宗谷岬に向かう海岸線沿いの漁師さんの家は大きく立派で、高級車が置いてある。道北の道すがらでは、ここが一番裕福な集落に見えた。沿岸でとれる、ほたて、たこ、なまこ、か



<塩狩峠から観る大雪山>

に、などの賜物だという。

滝川から歩き始めて丁度 2 週間、6 月 11 日 15 時 10 分宗谷岬に到着した。

#### \*動物

牛の放牧地の道を歩いていると、それに気づいた一頭の牛が立ち上がってこちらに体を向けると、周りの何十頭もの牛が一斉立ち上がってこちらに迫ってくる。間には太い木の柵などはなく、細い電線が 2 本ほどあるだけ。こちらが早足で進むと牛の方も怒涛の迫力で迫ってくる。電線を破って押し寄せるのではないかと、気が気ではなかった。飼育係りの人と思っているのだろうか。



<牧草地>

牛は予期しなかったが、心配だったのは熊だ。

熊出現のニュースや看板もある中、国道を離れて人っ子一人いない山沿いの道道や農道を通ることがしばしばあるからだ。中川町の山沿いの道を歩いている時だった。前からきたダンプカーが止まって「この先に熊がいた」と教えてくれ、天塩川の川向こうの国道までダンプで送ってもらったこともあった。熊よけ鈴の代わりに「Sing Along」と「りんご追分の階名唱」を何度も歌ったので、すっかり暗唱してしまった。

#### ■気候と体調

今年の同時期、道南の旅は非常に暑かった。それで今年も真夏の格好で行ったのだが大誤算。新千歳空港に着いて間もなく半袖下着を買い、パジャマ用に準備していた長袖 T シャツも着込み、それでも寒い時はカップも着て寒さを凌いだ。関西の最高気温が 30℃という日に道北は 13℃くらいだったので、宿ではストーブをつけていた。



<サロベツ原野と利尻富士>

今回体調は良く、マメもできず、腰も痛まず、歩きに慣れた 6 日目からは 30km を超える日でも、宿に転がり込むようなことはなかった。ただ胃弱のため、食事を摂ったあと 1 時間ほど休んだ後でも、胃が落ち着くまでトボトボと歩かざるを得なかった。こうして省エネの歩き方が身に付いたのか、帰ってきて旅の間止めていたふくらはぎの筋トレをすると筋肉痛になってしまった。ハツラツと地を蹴って進むのではなく、トボトボと小股で歩くのでらふくらはぎを使っていなかったのだろう。

#### ■出会った人々

##### \*二人の芸術家

深川を歩いていると、廃校あとの小学校校舎を利用した芸術文化交流施設「向陽館」が目についた。入ってみると、校舎の各教室に何百点にもものぼる絵画が展示されていて、講堂には製作中の巨大な絵がある。ここを制作展示拠点にしているのは高橋要氏。ご本人や奥様に話を聞くと、高橋氏はほとんど独学で絵を勉強し、若い時は旭川の町や一時期東京でも自分の絵を自転車に積んで売り歩いたそうだ。現在、ラジオを聴きながら六カ国語を勉強中で忙しいらしい。いいなど思う絵も多く、活力ある人だった。

おといねっが 音威子府でも廃校を利用した砂澤ビッキ「BIKKI アトリエ 3 モア」を見つけて立ち寄った。1989

年 59 歳で亡くなったアイヌの木彫家、ビッキ氏の写真や作品、ナタやナイフなどの制作道具を見ていると、棟方志功とも通じる親しみを覚えた。

#### \*お世話になった宿

一つは、中川郡中川町の民宿に泊まった 6 月 5 日（金）翌日土曜日の朝、ズボンのポケットから財布を出そうとしたが入ってない。昨夕、最後に財布を出したコンビニへ朝一番に駆けつけたがない。財布には現金のほかカード類や他の総てを入れていたのでお手上げだ。お金を送ってもらうにも郵便は一日では届かない。銀行振込もこちらに振込先口座がない。困って民宿のおばちゃんに相談すると、自分の口座番号を教えてくれた上に、信用金庫が休みでお金が下ろせないことが分かったと、十数万円をポンと立て替えてくれた。お陰さまで予定通り翌日の日曜日に出発することができ、おばちゃんの親切と度量の大きさに感謝。

ところが、3 日後にその財布がリュックサックの奥から出てきた。あの日に限ってズボンのポケットからリュックサックに入れ替えていたのを、一晩ですっかり忘れていたのだった。出てきた嬉しさ半分、忘れた悲しさ半分。

一つは、旅の終盤、かつてはサロベツ原野だった JR<sup>ゆうち</sup>勇知駅近くの「悠遊ファーム」だ。予約電話を入れると、宿泊施設は一軒貸しのロッジで食事はないという。しかしこちらの事情を説明するとオーナーの好意でボランティア用だが立派な部屋に案内され、食事もオーナーやボランティアの皆さんと一緒に会話をしながら、楽しくいただくことができた。貴重な体験だった。

ボランティアと思っていた若い女性 3 人（内 1 人は台湾国籍）は「WWOOF（ウーフ）」という世界的ネットをもつ組織に登録し、同じ組織に登録しているこの施設を申し込んで来ている人達だった。調べてみると《WWOOF とは、お金のやりとりなしで、「食事・宿泊場所」と「力」そして「知識・経験」を交換するしくみです。》とある。ここの皆さんを見ていると、その理念がよく具現化されていた。

二日後、宗谷岬で偶然その彼女ら 3 人に再会。明るく元気な皆さんに岬から稚内まで車で送ってもらった。

#### \*混声合唱団「稚内フラウエンコール」

悠遊ファームの紹介で「稚内フラウエンコール」の練習を、稚内に到着した夜に見学させてもらった。宿まで迎えに来ていただいたのはベースの門馬<sup>もんま</sup>さん 70 歳。海上保安官を定年退職後、全国の中から稚内を選んで奥さんと移り住んだという穏やかな方。練習メンバーは 20 名余り。雰囲気も良くよい歌声だった。終わりに 1 曲一緒に歌わせていただき、久しぶりに合唱ができて嬉しかった。

#### \*お世話になった沼田さん

昨年の第 2 次北海道旅行のおり道の駅でたまたま出会い、旅の途中で何か不都合が起きた場合は連絡してください、と書いて名刺をくださった同年輩の方がいた。今回、再び北海道に来たことを連絡したところ、歩き旅が終わったら車で北海道を案内しましょうとおっしゃる。日程も許したので、ご厚意を受けることにした。

礼文島と利尻島を回って 6 月 13 日の夕方稚内港に着くと、その沼田さんが旭川から 4 時間近くかけ迎



<沼田さん>



えに来られ、ライダー憧れのサロベツ原野の海岸沿いを快走しながら旭川のホテルまで送っていただいた。

明るく日は旭川と上川町の二つのハーブガーデンと、美瑛<sup>びえい</sup>「前田真三写真ギャラリー」などを案内していただき、8時間ほどかけて札幌まで送っていただいた。ご親切にはお礼の言いようがない。

### ■礼文島と利尻島

宗谷岬に到達した翌日 12 日から 2 日間かけて、礼文島と利尻島を訪れた。稚内港から朝一番のフェリーで礼文島に渡り、写真で見たイギリス海岸のような素晴らしい景色の島をトレッキング。緯度が高いので高山植物が咲き、中でもレブンアツモリ草を目当てに多くの人々が来るようだ。礼文島から観る利尻富士は圧倒的な存在感があった。



<礼文島から観る利尻富士>

礼文島トレッキングの後、夕方のフェリーで利尻島に渡って宿泊。翌日、レンタル・ミニバイク

で利尻島一周 55km を巡った。宮崎県から軽自動車に寝泊りしながらレブンアツモリ草を目当てに来て目的を叶え、利尻富士登山も終えたという夫婦があり、また巨大なクルーズ船「パシフィック・ビーナス号」で入港し、バスを連ねて回るグループもあった。

折角稚内まで行くのだから礼文・利尻の島にも、という思いで行ったが、行ってよかった。礼文島をトレッキング中、ここに 4 日間居たが天候が悪くてこの日初めて利尻富士が見えた、という夫婦に出会った。私はとても運がよかったのだ。

### ■旅を終えて

今回の旅で、沖縄、九州、本州、北海道を歩いて縦断してしまった。もういいかなと思いながら旅から帰ってくると、妻が新聞の切り抜きをもってきた。

「日本再発見、リヤカーの旅」～海岸沿い歩き十五年で一周、自然の豊かさ実感～ というタイトルの記事で、70 歳代のおじさんが体験談を書いている。本州、北海道、四国、九州を一周し、歩いた距離は 1 万 3000km とあって、次は八十歳までに自転車で日本を一周したいとある。人は人、それぞれだと思うのだが、妻はしきりに感心している。



<宗谷岬、悠遊ファームの皆さんと一緒に>